

タイトル	献辞(3)
著者	村山, 出
引用	北海学園大学人文論集, 26・27: xv-xvi
発行日	2004-03-31

献辞 村山出先生

村山出先生は、昭和29年北海道大学文学部文学科を卒業され、同年北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程に進学、昭和31年同課程修了後、同年同文学研究科国文学専攻博士課程に進学、昭和34年同課程を単位取得退学されている。

昭和29年に豊平町立石山高等学校教諭として着任以来、昭和30年～38年、札幌西高等学校教諭、昭和38年～45年、旭川工業高等専門学校講師・助教授、昭和45年～56年、帯広大谷短期大学助教授・教授、昭和56年～平成7年、小樽商科大学教授を歴任され、平成7年3月には小樽商科大学名誉教授の称号を授与されている。

平成7年4月に本学人文学部教授として着任され、平成11年新設の北海学園大学大学院文学研究科修士課程、同13年新設の博士課程担当教授を勤められ、現在に及んでいる。

先生は万葉集、特に山上憶良及び奈良時代前期万葉歌人の研究をされ、この分野において多大な業績を残された。それらは、昭和51年刊行の『山上憶良の研究』、平成5年刊行の『奈良前期万葉歌人の研究』、平成14年刊行の『宮廷詩人車持千年』に結実されている。これらのご著書について簡単に記すと、『山上憶良の研究』では憶良の初期の作品から晩年に至る主要な作品を考察し、知識官人として中国文学や仏教思想などに学び、人間の苦悩に目を向けた憶良の創作態度を追及し、『奈良前期万葉歌人の研究』では笠金村・山部赤人・大伴旅人・山上憶良・高橋虫麻呂ら、奈良前期万葉歌人の代表的な歌を取り上げ、中国の文学や思想を受容し個性を発揮しつつ神亀天平文化の隆盛を文学の面で担った意義などを考察し、『宮廷詩人車持千年』では女帝の立場、女帝の歌の発想に立った車持千年の歌の位置づけなどを行っている。この他にも多数の論文があり、憶良及び奈良時代前期万葉歌人の研究の第一人者として活躍されてきた。学会活動では上代文

学会理事をつとめ、平成 11 年からは北海道大学国語国文学会副会長に任にある。

研究のあり方は堅実、実証的で手堅いものである。しかし、先生の研究は堅実、実証性だけに留まるものではない。あまり知られていないことであるが、先生は学生時代、詩作に興じ、詩集『灯』を発行され詩人としての才能を発揮されている。詩人の魂が万葉集の研究に息づいているのである。

また、昭和 58 年刊行の『憂愁と苦悩 大伴旅人 山上憶良』のご著書をはじめとして、平成 3 年刊行の『山上憶良 人と作品』（中西進編）、平成 5 年刊行の『万葉集Ⅱ 和歌文学講座 3』（稲岡耕二他編）、平成 6 年刊行の『講座古代文学 4』（古橋信孝他編）、平成 9 年刊行の『国文学 解釈と鑑賞』（8月号）、平成 12 年刊行の『万葉の歌人と作品 4』（神野志隆光・坂本信幸編）などに執筆され、研究者のみならず、万葉集の研究を志す者、万葉歌を愛好する人たちの道しるべとなってきた。

本学においては、平成 11 年 4 月から平成 13 年 3 月まで人文学部長を併任、平成 13 年 4 月から平成 15 年 3 月までは大学院文学研究科長を併任、研究科長時代には英米文化専攻修士課程の新設を成し遂げ、本学の発展に尽力された。

学部では「日本文学概論」、「日本文学史」、「演習」など、大学院では「万葉集と大陸文化特殊講義」、「万葉集と大陸文化特殊講義演習」を担当され、熱心に教育にあたられると共に研究の厳しさを身をもって示された。

本年 3 月末をもって先生はご退休の日を迎えられる。さまざまな形で先生と関わりを持った者一同、深く感謝の意を表したい。 （小野寺静子）